



1) 『星々』(1849年)より『流れ星』

M氏コレクションによる
J・J・グランヴィール
J.J. Grandville

県美プレミアムⅢ

2018年11月17日(土) — 2019年3月3日(日)

特集「類は友を呼ぶ」



6) 辻愛造《宮浦》1942年



7) 国枝金三《港風景》1914年

(いずれも「光と影」) ※第2章展示作品

県美プレミアム 小企画＝館外作品を中心とした小企画展 特 集＝収蔵品によるテーマ展

兵庫県立美術館は、前身の近代美術館時代から数えて約45年にわたり収集活動が続け、現在10,000点を超える作品を収蔵しています。それらは収集方針を反映して、国内外の近代彫刻と版画、日本近代の名作、兵庫ゆかりの作品、関西の現代美術に大別されますが、内容は実に多岐にわたり、一瞥しただけではその総体をとらえきれません。そこで、当館では、1年を3期に区切り、個々に展示のテーマを設けることによって、横断的にコレクションを紹介し、変化に富んだ常設展示をおこなっています。

開催情報

県美プレミアムⅢ

小企画 「M氏コレクションによる J・J・グランヴィル」

特 集 「類は友を呼ぶ」

会 期 2018（平成30）年11月17日（土）－2019（平成31）年3月3日（日）

開館時間 午前10時－午後6時（特別展開催中の金・土曜日は午後8時まで）
入場は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日（ただし、12月24日、1月14日、2月11日の祝日、振替休日は開館、12月25日、1月15日、2月12日の火曜日は休館）、年末年始およびメンテナンス休館（12月31日（月）－1月10日（木））

会 場 兵庫県立美術館 常設展示室
（〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1 TEL:078-262-0901 <https://www.artm.pref.hyogo.jp>）
常設展示室6（小企画「M氏コレクションによる J・J・グランヴィル」を開催）
常設展示室1～5（特集「類は友を呼ぶ」を開催）
※このほかに小磯良平記念室、金山平三記念室があります

観 覧 料 一 般：500（400）[300] 円／大学生：400（300）[200] 円／70歳以上：250（200）[150] 円／
高校生以下：無料
*（ ）は20名以上の団体料金／[]は特別展とのセット料金
*障がいのある方（70歳以上を除く）は各観覧料金の半額、その介護の方1名は無料
*毎月第2日曜日は公益財団法人伊藤文化財団のご協力により無料で観覧できます。
*11月24日～25日は「関西文化の日」により無料で観覧できます。

主 催 兵庫県立美術館
後 援 公益財団法人伊藤文化財団

M氏コレクションによる J・J・グランヴィル *J.J. Grandville*



2) 『ル・マガザン・ピトレスク』(1847年)より『第一の夢：罪と贖罪』

本展のみどころ

- ★『ラ・カリカチュール』掲載作品をはじめ初期の諷刺画に描かれた小気味よいユーモアとアイロニー。
- ★『動物たちの私的公的生活情景』、『もうひとつの世界』など中期の傑作挿絵本に見られる幻想的イメージ。
- ★『生きている花々』、『星々』といった晩年の作品に登場するロマンティックで優美な女性像。
- ★石版画から木口木版画まで、19世紀挿絵版画が到達した精緻な線の魅力。
→奇想の天才絵師が小さな紙の中に凝縮させたイマジネーションとポエジーを存分にお楽しみください。

開催趣旨

J・J・グランヴィル(1803年-1847年、本名ジャン＝イニャス＝イシドル・ジェラルド)は、19世紀前半のフランスで活躍した代表的な諷刺画家・挿絵画家です。動物と人間が変身・合体し、生物と無生物とが混交する幻想的作品は、20世紀のシュルレアリスム絵画を先駆するとさえ評されます。本展は、国内有数のグランヴィルのコレクターであるM氏が所蔵する書籍約20冊と、そこから分割したシート作品約200点などを一堂に展示し、近代美術史の中でも類まれなイマジネーションの持ち主であったグランヴィルの足跡をたどります。

関連事業

1. 講演会

「19世紀フランス挿絵本の世界
—グランヴィル、ガヴァルニ、ドーミエを中心に—」
講師：柏木隆雄氏(大阪大学名誉教授、大手前大学前学長、
日本フランス語フランス文学会前会長)
2月9日(土) 午後2時30分～(約90分) (開場2時)
レクチャールーム 参加無料(先着100名・要観覧券)

2. 学芸員による解説会

11月24日(土)、2月23日(土)
両日とも午後4時～(約45分)
レクチャールーム 参加無料(先着100名・観覧券不要)

第1章 諷刺画家グランヴィル登場

ナンシーに生まれたグランヴィルは、成人後パリに出てイラストレーターとして活動を始めます。リトグラフによる風刺画シリーズ『良きブルジョワの日曜日』（1827年）で注目を集めた彼は、人物を動物に見立てたリトグラフ集『当世風変身譚』（1829年）でさらなる名声を得ます。その後、特に、編集者シャルル・フィリポンによる諷刺新聞『ラ・カリカチュール』に活躍の場を得て、政治や世相を揶揄する作品を次々と発表しました。



3) 『当世風変身譚』（1829年）より《散歩》

第2章 挿絵本での活躍

1835年の『ラ・カリカチュール』休刊以後は、『ラ・フォンテーヌの寓話』（1838年）、『動物たちの私的公的生活情景』（1842年）といった木口木版を主体とする挿絵本が、グランヴィルの主な活動の舞台となりました。これらの作品は、『当世風変身譚』以来彼の得意技となっていた動物化された人間のイメージの発展型と見なすことができます。特に、『もうひとつの世界』（1844年）では、人間と動物とのありとあらゆる合体や変形、さらには生物と非生物の混交にいたるまで、めくるめくイメージの奔流を見ることができます。



4) 『もうひとつの世界』（1844年）より《彗星の大旅行》

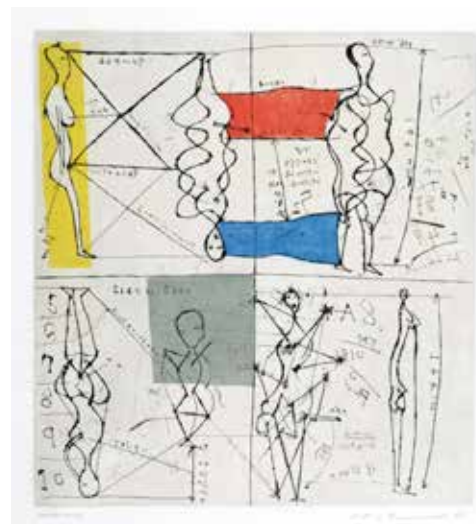
第3章 晩年、そして没後

晩年になると辛辣な諷刺性や奇抜なイメージはいくぶん後退し、『生きている花々』（1847年）や没後出版された『星々』（1849年）のように、美しい女性を花や星に見立てたロマンティックな世界を描くようになります。これは、1842年に亡くなった最初の妻アンリエットの面影を反映させたためとも言われます。しかし、彼の絶筆とされる《第一の夢：罪と贖罪》は、ある悪夢をめくるめくイメージの変容のうちに表現しており、奇想の作家グランヴィルの最後にふさわしい作品といえるでしょう。



5) 『生きている花々』（1867年・初版1847年）より《ヤグルマギクとヒナゲシ》

特集「類は友を呼ぶ」



参考図版) 池田満寿夫《サイズはサイズ》1963年

本展のみどころ

- ★作品同士を比べるので、楽しみながら鑑賞できます。
- ★簡単な説明でも鑑賞者自らが発見することになるので、初心者の方でも鑑賞できます。
- ★近代から現代までの幅広い作品を展示します。
- ★金山平三は、記念室とあわせて2つの観点から鑑賞できます。



8) 斎藤義重《作品3》1960年

※いずれも第1章展示作品

開催趣旨

本年度最後の「県美プレミアム」の特集展示では、「類は友を呼ぶ」と題して、類似した作品を比べながら鑑賞する展覧会を開催します。

作品鑑賞においては、ひとつひとつに集中して見るべきで、周りからの影響を受けないほうがよいという考え方があります。しかし、展覧会は、通常、1点の作品からなるのではなく、まとまった作品が並びます。企画者が設定した文脈に沿って、あるいは、展示の流れから文脈を想定しながら観客は見ていきます。つまり、他の作品からなんらかの影響を受けるわけです。個々の作品に集中することと他作品から影響を受けることは対立するのではなく、両方は混在し、交じり合うのが実際の体験ではないでしょうか。そうした実態を認めて、個々の作品を鑑賞しつつも、他作品から得られる視点が有効であれば、積極的にフィードバックして加えてよいはずです。本展では、このような考えに基づき、類似作品の比較を促すことを試みます。これにより、たとえば、作品の骨格が捉えやすくなったり、あるいは、作品同士の違いから個々の作品の独自性が明らかになったりすることを願っています。

第1章 千の線

はじめりの章では、線が特徴的な絵画、版画を展示します。絵の基本的な要素である線の表現は、細い、太いから始まり、フリーハンドや定規によるもの、滑らかなものや摩擦の激しいものなどさまざま、絵画、版画の多様性を作り出す要因のひとつです。さらに、線はかたちや空間を作り出す要素でもあります。ここでは、線の諸相のいくつかを紹介します。

【常設展示室1】

第3章 仰視と鳥瞰

描かれる対象は真正面からだけでなく、見上げたり、見下ろしたりといったさまざまな角度から捉えられています。こうした画中の視線の方向は重要な要素のひとつです。また、描かれた内容の中ではなく、絵画の形式的な特徴が絵画本体を仰ぎ見ることを促す場合さえあります。この章では、見る側と作品との関係のひとつのあり方として、実際に仰視と鳥瞰をさせる展示を試みます。

【常設展示室1】

第4章 白と黒

明治の終わりから昭和の前半にかけて、創作版画の動きがありました。創作版画は、絵師、彫師、刷師らの伝統的な分業体制ではなく、ひとりの芸術家がすべての過程をこなして制作する版画のことです。ここでは、白と黒の対比が明快な木版画を並べます（白と黒は第2章の「二つの項」にも該当します）。作品同士を比べると、海や太陽など同じモチーフであっても、黒にも白にもなりうるということが分かります。その選択は作家の手の内にあり、全体の情景や近隣モチーフとの関係、その他によって決まるのではないのでしょうか。白と黒の対比がとくに素晴らしいのが谷中安規（1897-1946）の版画です。

【常設展示室2】

第2章 二つの項

本展で比較が成り立つのは、二つ以上の作品が並ぶからです。2 という数字は、物事に違いや変化を生じさせる最も小さな単位です。この章では、作品の基本的な構成が捉えやすい、2つの項（領域）からできている特徴的な作品を並べます。

注目すべきは、2項は上下や左右の分割といった形式的なこともあれば、光と影、天と地、屋内と屋外など、描かれた内容のこともある点です。2項はさまざまなか所で見出すことができるでしょう。

【常設展示室1】



9) 白髪一雄《黄帝》1963年



10) 菊畑茂久馬《天動説 - 二》

1983年

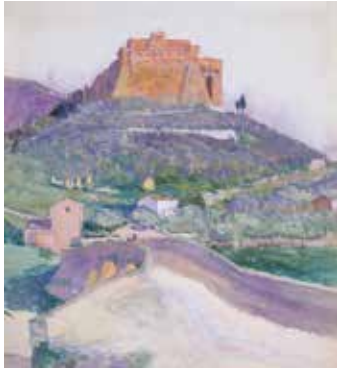
(いずれも「仰視」)



11) 谷中安規《少年時代》1932年



12) 中川雄次郎《授業の中にて》1934年



13) 金山平三《無題 (山頂の館)》
1913-15 年



14) 金山平三《首里》1941 年

(いずれも「画面中央に道を配した風景画」)

第5章 モチーフ

当館のまとまったコレクションである金山平三(1883-1964)の風景画の中でもとくにモチーフの取り上げ方およびその構成の仕方が似ているものをいくつかまとめてみました。それらは、時期が異なってもよく似ていることがあります。金山の風景画にはいくつかの型があるのかもしれませんが、それらは、金山が長年の経験で培った美的なパターンといえるかもしれません。

【常設展示室 2】

第6章 透明・不透明



15) 久野真《鋼鉄による作品 # 363-1》
1978 年



16) 斎藤義重《三角体 Z》
1982-85 年

(いずれも「不透明」)

絵画を、窓から見える景色にたとえることがあります。それは、絵具の物質感をほとんど感じさせない、光に満ちたイメージです。その一方で、絵具の物質性を前面に押し出す絵画も数多く描かれてきました。この章では、透明なものから不透明なものまでの絵画(版画を含む)を展示します。透明・不透明は、絵の内容の場合と、実際の物自体の場合があります。さらに、後者では、絵具の層だけでなく、絵具を付ける土台(支持体)の透明、不透明もあります。こうした透明、不透明の幅の広さは、絵の多様さ、豊かさを示すひとつの例といえるでしょう。

【常設展示室 3】

第7章 言葉



17) 平田洋一《コレイガイノスベテ (このキャンパス以外のすべての宇宙空間)》1972 年



18) 高松次郎《英語の単語》
1970 年 ©The Estate of
Jiro Takamatsu, Courtesy of
Yumiko Chiba Associates.

絵画や版画の中に文字のある作品を並べています。「読む」文字は「見る」絵の中でどのような役割や意味をもつのでしょうか。もっとも一般的なのが、文字もデザイン化されて、画面の中に融合する場合です。逆に、絵画という圧倒的に視覚優位の芸術の中に文字が入ることで、その優位を相対化させることがあります。さらに、内容のうえで、読むことと見る事が相互に補完することもあるでしょう。その際、文字はそれが書かれた画面の位置と深く結びつくことがあります。

【常設展示室 3】

第8章 面の組み合わせ

第6章が画面の垂直方向のあり方（画面の層）を扱ったのに対し、本章が取り上げるのは、画面の横方向のあり方です。

ここに並べるのは、いくつかの面が組み合わせられた作品です。面はひとつの単位として捉えることができます（本展に展示していませんが、日本の屏風はそうした例のひとつです）。面の組み合わせ方がユニークなもの、面の組み合わせが描かれた内容と巧みに関係するものなどがあります。

【常設展示室 3】



19) 彦坂尚嘉
《Wood Painting: Melancholy》2002-04 年



20) 榎倉康二《無題》1980 年

第9章 人体と物体

当館の収集の柱のひとつである近・現代彫刻を紹介します。近代彫刻では、ロダン（1840-1917）からジャコメッティ（1901-1966）までの人体彫刻を、現代彫刻では、主に既製品を用いたり、既製品によく似ていたりする彫刻を展示します。最後に並ぶシーガル（1924-2000）の《ラッシュアワー》は、生身の人間から直接型をとっています。まるで人体さえも既製品のような扱いだといえるかもしれません。

【常設展示室 5】



21) オーギュスト・ロダン《オルフェウス》
1892 年



22) 今村源《レイゾウコとヤカン》
2015 年（新収蔵）

第10章 集積

最後の章では、既成の物を集合させたり、積み上げたりした彫刻を主に並べます。集まっている個々の物がなんであるかははっきりしていないので、個々の物と、それらによってできあがる全体との関係が捉えやすいのです。つまり、このタイプの作品は、作品自体の中に比べるのを促す力を宿しているといえるでしょう。

【常設展示室 4】



参考図版) ルイズ・ネヴェルソン
 《セルフ・ポートレート:サイレント・
 ミュージックⅣ》2003年頃



23) 東山嘉事《題名不詳（赤い円 2）》
 制作年不詳

小磯良平記念室

神戸生まれの小磯良平（1903-1988）は、日本近代洋画の巨匠のひとりです。優美で気品のある人物像は、現在も私たちを魅了することでしょう。昨年寄贈された《踊り子》や戦後の群像画である《歩む男達》のほか、アトリエの様子を描いた作品などを展示します。

金山平三記念室

神戸生まれの金山平三（1883-1964）は風景画家として優れた才能を発揮しました。今回の展示では、彼の風景画を「山のある風景」、「水のある風景」、「都市の風景」、「人々の営み」の4つに分類します。展示にあたり、特集展示の第3章「仰視と鳥瞰」に応じたインスタレーション（配置）を行います。彼の風景画は、特集展示の第5章の中でも別の観点で展示しますので、あわせてご覧ください。

関連事業

（1）学芸員によるギャラリートーク

11月25日（日）、12月22日（土） 両日とも午後4時～（約45分） エントランスホール集合 参加無料（要観覧券）

（2）講演会「今村源 自作を語る」

本展に新収蔵の今村氏の彫刻を展示します。この機会にあわせた講演会です。 ※兵庫県立美術館芸術の館友の会共催
 1月20日（日）午後2時～（約90分） レクチャールーム 参加無料（先着100名）

（3）ミュージアム・ボランティアによるガイド・ツアー

会期中の金・土・日 午後1時～（約45分） エントランスホール集合 参加無料（内容により要観覧券）
 ※12月29日（土）・30日（日）は除く

お問い合わせ先

兵庫県立美術館

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1

TEL: 078-262-0901 (代表) FAX: 078-262-0903 (代表)

<https://www.artm.pref.hyogo.jp>

取材・画像提供に関すること

営業・広報担当

TEL: 078-262-0905 (担当直通) FAX: 078-262-0903

展示内容に関すること

TEL: 078-262-0909 (学芸直通) FAX: 078-262-0913 (学芸直通)

小企画「M氏コレクションによる」J・J・グランヴィル」

担当学芸員：岡本弘毅

e-mail: okamoto@artm.pref.hyogo.jp

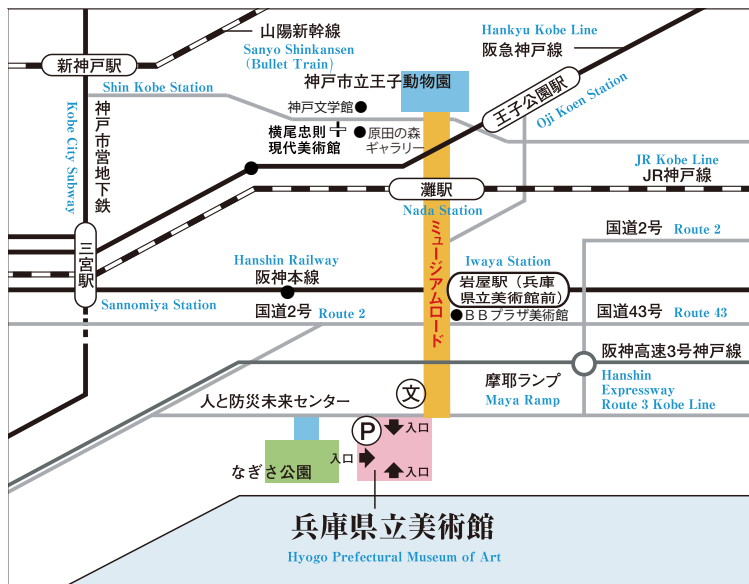
特集「類は友を呼ぶ」

担当学芸員：出原均、西田桐子

e-mail: dehara.h@artm.pref.hyogo.jp

【交通案内】

- ・ 阪神岩屋駅（兵庫県立美術館前）から南に徒歩約8分
- ・ JR神戸線灘駅南口から南に徒歩10分
- ・ 阪急王子公園駅西口から南西に徒歩約20分
- ・ JR三ノ宮駅南から神戸市バス（29、101系統）阪神バスにて約15分
HAT神戸方面行き「県立美術館前」下車すぐ
- ・ 地下駐車場（乗用車80台収容・有料）
- *ご来館はなるべく電車・バスをご利用ください
- *団体バスでお越しの場合は、バス待機所のご予約をお願いします。



広報用画像について留意事項

このプレスリリースに掲載されている画像データをプレス掲載用にご用意しております。末尾の「申込書」をご使用ください。

○作品画像を媒体掲載されるときには、「申込書」に記載の作家名・作品名・制作年などを必ず入れてください。

○作品画像は全図で使用してください。トリミングや文字を重ねるなど画像の加工・改変はできません。

○画像データ使用は、本展覧会の紹介用のみとさせていただきます。それ以外での使用はできません（会期終了まで）。

○再放送、転載など二次使用をされる場合には、別途申請いただきますようお願いいたします。

○基本情報、図版使用の確認のため、ゲラ刷り・原稿の段階で「営業・広報担当」までお送り願います。

○展覧会場の取材、撮影をご希望の場合についても、「営業・広報担当」までご連絡ください。事前にご連絡のない取材・撮影はお断りいたします。

○本展に関する記事をご掲載いただきました際には、お手数ですが、掲載誌・紙または記録媒体（VTR/DVD）、URLなどを、「営業・広報担当」宛てに、1部お送りくださいますようお願いいたします。

関西文化の日

当館では2018年11月24日（土）・25日（日）に、多彩なプログラムを開催します（「県美プレミアム」は観覧無料）。

広報画像申込書

県美プレミアム 2018 年 11 月 17 日 (土) - 2019 年 3 月 3 日 (日)

小企画「M氏コレクションによる J・J・グランヴィル」

※ご希望の画像の番号に○をつけてください。後日データをお送りいたします。

1 『星々』(1849 年) より《流れ星》

2 『ル・マガザン・ピトレスク』(1847 年) より《第一の夢：罪と贖罪》

3 『当世風変身譚』(1829 年) より《散歩》

4 『もうひとつの世界』(1844 年) より《彗星の大旅行》

5 『生きている花々』(1867 年・初版 1847 年) より《ヤグルマギクとヒナゲシ》

※上記の画像を媒体掲載されるときには、前頁「広報用画像について留意事項」をご一読ください。

●貴媒体についてお知らせください。

○貴社名：

○媒体名： (新聞・雑誌・ミニコミ・TV・ラジオ・ウェブサイト・その他)

○ご担当者名：

○メールアドレス：

ご連絡先 ○電話番号：

○FAX 番号：

○ご住所： 〒

○URL：

○掲載・放送予定日：

○画像到着希望日：

○読者・視聴者プレゼント用招待券： 組 名 様分を希望

(※特集「類は友を呼ぶ」と合わせて最大 5 組 10 名まで。本展を媒体でご紹介いただける場合に限りです)

広報画像申込書

県美プレミアム 2018 年 11 月 17 日（土）－ 2019 年 3 月 3 日（日） 特集「類は友を呼ぶ」

※前頁「画像使用に際しての注意」をご一読のうえ、ご希望の画像の番号に○をつけてください。

6	辻愛造《宮浦》1942 年
7	国枝金三《港風景》1914 年
8	斎藤義重《作品 3》1960 年
9	白髪一雄《黄帝》1963 年
10	菊畑茂久馬《天動説 - 二》1983 年
11	谷中安規《少年時代》1932 年
12	中川雄次郎《授業の中にて》1934 年
13	金山平三《無題（山頂の館）》1913-15 年
14	金山平三《首里》1941 年
15	久野真《鋼鉄による作品 # 363-1》1978 年
16	斎藤義重《三角体 Z》1982-85 年
17	平田洋一《コレイガイノスベテ（このキャンバス以外のすべての宇宙空間）》1972 年
18	高松次郎《英語の単語》1970 年 ©The Estate of Jiro Takamatsu, Courtesy of Yumiko Chiba Associates.
19	彦坂尚嘉《Wood Painting: Melancholy》2002－04 年
20	榎倉康二《無題》1980 年
21	オーギュスト・ロダン《オルフェウス》1892 年
22	今村源《レイゾウコとヤカン》2015 年（新収蔵）
23	東山嘉事《題名不詳（赤い円 2）》制作年不詳

●貴媒体についてお知らせください。

○貴社名：

○媒体名：

(新聞・雑誌・ミニコミ・TV・ラジオ・ウェブサイト・その他)

○ご担当者名：

○メールアドレス：

ご連絡先 ○電話番号：

○FAX 番号：

○ご住所： 〒

○URL：

○掲載・放送予定日：

○画像到着希望日：

○読者・視聴者プレゼント用招待券：

組

名 様分を希望

(※小企画「J・J・グランヴィル」と合わせて最大 5 組 10 名まで。本展を媒体でご紹介いただける場合に限りです)